

元祖「常識越え」

ココ・シャネルの人生

みなさん、テスト結果はいかがでしたか？ 全科目合格？ それとも、合格科目がなかったなんて人もいたりして……。でも、常識テストで合格点をとったからって、女性として、人として、合格なわけでは決してありません。かのココ・シャネルだって、常識にとられない彼女の型破りな発想が、この世に新しい常識を生んだのですから。

狭い価値観の中での「お約束」をせせら笑い、次々と新しい美を「発明」したココの一生とは？

中野香織さん 服飾家、コラムニスト

「無難」「浮かない」「常識的」ということばは、ココ・シャネルの脳内辞書には、ない。

いやあったとしても、軽蔑の対象としてのみ存在する。横並び志向のちまちなした虚栄心が支える基準などで競っていても、孤児院育ち、ボーイッシュな体型のシャネルにはいつまでたっても勝ち目はない。ならば、狭い価値体系のなかで馴れ合う上流階級の女た



ジャケットの袖を折り返して、フレンチスタイルの中に、ラフ感をプラス。そんな遊び感覚こそが、着なしを楽しむ。©amanaimages

ちの「お約束」のバカバカしさをせせら笑い、自分こそが「常識」になればよいのだから。

とシャネルが思ったかどうかはわからないが、少なくとも彼女が生み出したファッションは、従来の慣習を覆したり、過去になかった発想をもちこんだりした結果、それが新しい「常識」に化けてしまった……という革命的なものばかり。「ファッションにおいて成功したと感じるとき、それは人を驚かせたとき」とシャネルが語るとおり、シャネルが放った「価値転覆の驚き」は世を熱狂させた。

装飾過多の帽子やドレスで着飾るのがレディの常識だった時代に、メンズライクなセーターやパンツでフレンチユウな女らしさを表現できることを証明。「貧者の素材」と見下されていたツイードやジャージーを高級品として

流行させる。これ一着あればアクセサリで多彩な表現が可能、という「リトルブラックドレス」なるシステムを発明。本物とニセモノを一緒に使った大胆不敵なコスチュームジュエリーを考案し、「本物」信仰をコケにする。合成香料をはじめて使用し、無機質な番号で名づけた四角いボトルの超モダンな香水「シヤネルNo.5」を発売、デザイナーの名を冠した香水ビジネスの先駆けとなる……。



ツイードジャケットに、ネットスを重ねつけ。さらに帽子をオン。彼女の自由な発想が今のコンサバスタイルのベース。©amanaimages

こうして羅列してみると、「エレガンスとは、(間違った)側面が(正しい)側面と同じように美しくなるときに生まれる」というシャネルの考え方が、一貫していることがわかる。「常識」を突き抜け、「正しさ」と「間違いない」境界で戯れてみせる。その小気味よい痛快

さが人を魅了し、新しいモードを生んだ。そんな型破りなモードの数々は、彼女のこれまた常識の枠におさまりきれない情熱的な恋愛の数々から生まれている。

イギリスのアーサー・カベルとの恋愛から、英国カントリースタイルのセーターやカーディガンが生まれた。ロシアのデイミトリー大公との交際は、ロシアンルックの流行を導いた。また大公から贈られた多くの宝石は、ビザンチン様式のコスチュームジュエリーのヒントになる。さらに、ウエストミンスター公爵との恋愛を通して、ヨット、競馬、フライフィッシング、カントリーの邸宅でのパーティなど、英国上流階級の贅沢なライフスタイルを経験、ラグジュアリーの本髄を学んだ。

恋によって仕事のきっかけをつかみ、仕事に仕事を拡大し……という常識はずれの循環から成るのがココ・シャネルの人生である。当然、年齢や世代の「らしさ」なんて知ったことではない。公爵との恋愛が世界の注目を集め、仕事でも続々大ヒットを飛ばしたのは40代だったし、戦後、華麗な復活を遂げたのは70歳のときだった。以後「ホテル・リッツ」の部屋で87歳で没するまで、首からはさみをぶらさげ、仕事と恋に生ききったのである。

KAORI NAKANO
本誌をはじめ数誌に連載中。訳書の一つに『シャネル スタイルと人生』(文化出版局)、著書に『モードの方程式』(新潮社)などがある。

撮影/平郡政宏
ヘア・メイク/ニ法田 諭(ラドンナ)
スタイリスト/高橋周子
構成/河合由樹



ローウエストにしたベルトと足元で、カシメルに着崩したスタイルは、当時としてはまさに型破り。©amanaimages